

## I-2 船内の文化・スポーツ・娯楽設備の現状とその利用

目 次		ユー調査 (回答者は船の責任者又はレクレーション委員)
A. 調査の実施と結果	14	3. 調査対象 外労協所属社のうち6社11隻 外労協所属社のうち1社全船 61隻
B. 若干のまとめ	20	4. 回収隻数 6社10隻 1社31隻
A. 調査の実施と結果		5. 結 果 文化・スポーツ設備 表1～ 表6 文化・スポーツ用具 表7～ 表13
1. 調査時期	1976年11月～1977年 3月	
2. 調査方法	アンケート調査と訪船インタビ	

表1. 体育室・プール・ゴルフネットの設備

1970調査

船種	*調査隻数	体 育 室	プ ー ル	ゴルフネット	計
貨物船	25	1隻(5m×5m) (前隔離病室)			1
専用船	13	2隻(4m×3m) (作業員室代用)		1隻	3
油送船	14	3隻(7m×8m) (5.5m×10m)(10m×7m)	1隻 (7.2m×4m×1.5m)	3隻	7
その他	4		1隻 (4.6m×3.3m×1.5m)		1
計	56	6隻(6社)	2隻(1社)	4隻 (3社)	12隻

\*外航労務協会所属 21社、56隻

表2. 船の文化・スポーツ・娯楽設備

		1977調べ 6社 10隻									
	体 育 室	ゴ ル フ ネ ッ ト	ゴ ル フ 室	デ ッ キ ゴ ル フ ル	プ ー ル	ス モ ー キ ン グ ル ー ム	娯 楽 室	レ ク レ ー シ ョ ン ル ー ム	ラ ウ ン ジ	ゲ ー ム ル ー ム	図 書 室
所有隻数	7	5	1	1	1	6	1	2	1	1	6
所有社数	5	6	1	1		6	2	1	1	1	6
備 考	主としてスポーツ設備					主として文化・娯楽設備					

表3. 船内文化・スポーツ施設

		某社31隻 1977調べ	
	所 有 隻 数	備 考	
体 育 室	13隻 (41.9%)	17隻はすべて娯楽室も持つ	
娯 楽 室	20 (64.5%)		
タタミルーム	17 (54.8%)		
スモークングルーム	7 (22.5%)		
スポーツデッキ	3 (9.6%)		
サ ロ ン	2 (6.4%)		
計	31隻		

表4. 船種別・文化・スポーツ施設

		某社31隻 1977調べ(社、%)					
	貨 物	敏 石	敏 油	油 ・ L P G	コ ン テ ナ	他	計
調 査 隻 数	11	5	5	2	6	2	31
体 育 室	0	5 100.0	2 40.0	2 100.0	4 66.7	0	13 41.9
娯 楽 室	4 36.4	4 80.0	4 80.0	2 100.0	6 100.0	0	20 64.5
タタミルーム	1	4 80.0	4 80.0	2 100.0	6 100.0	0	17 54.8
スモークングルーム	3 27.3	1	1	0	0	2 100.0	7 22.6
スポーツデッキ	1	0	1	0	1	0	3 9.7

表5. スポーツ設備の利用度

1977調べ 6社 10隻

	体 育 室	ゴ ル フ フ ネ ット	ゴ ル フ 室	デ ッ キ ゴ ル フ	プ ル	計
よく使われる	5	1	0	1	0	(7)
時々使われる	2	1	0	0	0	(3)
ほとんど使われない	0	3	1	0	1	(5)
計	7	5	1	1	1	(15)
備 考 (調査用紙に記入 されていたこと)		が 使 め 用 後 の ど う 格 納			期 調 査 時 期 が 冬	

表6. 文化・娯楽設備の利用度

1977調べ 6社 10隻

	ス モ ー キ ン グ ル ー ム	娯 楽 室	レ ク リ エ ー シ ョ ン ル ー ム	ラ ウ ン ジ	ゲ ー ム ル ー ム	図 書 室	計
よく使われる	5	1	1	0	1	4	(12)
時々使われる	1	0	1	1	0	2	(5)
ほとんど使われない	0	0	0	0	0	0	(0)
計	6	1	2	1	1	6	(17)

表7. 備えつけ用具の種類数  
(但し、スポーツ・文  
化・娯楽用具について)

1977調べ 6社 10隻

船名	スポーツ	文化・娯楽	計
A	9	8	17
B	6	6	12
C	14	8	22
D	5	5	10
E	8	8	16
F	8	10	18
G	8	6	14
H	10	8	18
I	3	7	10
J	9	5	14
10隻	80	71	151
平均	8種	7.1種	15.1種

表9. 船内備えつけスポーツ用具

1977調べ  
6社 10隻について

	備えつけ 隻数	備考	
ゴルフクラブ	5	ゴルフ型	
ゴルフシュミレーターゴルフ	1		
デッキビリヤード	6		
フリーテニス	2	テニス型	
ハンドテニス	1		
テニボン	2		
卓球台	7	その他の球技	
野球一式	7		
バレーボール	2		
ソフトボール	2		
バドミントン	1		
ドッジボール	3		
玉つき	1		
ダーツ	5		楽一人 しめで も
輪なげ	7		
なわとび	2		
けん玉	1		
トローリング用具	1	武道型	
剣道具	1		
竹刀	1		
エキスパンダ	4	自分で コンデ イショ ニング の ため にす るこ とが 多い	
サンドバッグ・グローブ	1		
ビューティサイクル	3		
スタイリー	2		
ローイングマシン	2		
機械体操マット	1		
ブルワーカー	1		
バーベルセット	4		
腹筋台	3		
体重計	1		
計	80		

表8. つみこみ運動用具

1970調べ 21社 56隻

船種	調査隻数	計	1隻平均
貨物船	25	76	3.0
専用船	13	41	3.2
油送船	11	42	3.0
その他	4	11	2.8

表10. 備えつけ文化・娯楽用具

6社 10隻 1977調べ

用具名	隻数	備考
図書	9	1船200冊~500冊
アンマ器	2	
ビデオ	9	
ステレオ	8	
テレビ	8	
英会話テープ	1	趣味用具
カセットテープ	1	
写真・現像器	1	
8mm映写器	3	
盆栽	1	
囲碁	8	
将棋	8	
花札	1	かけごと
麻雀	9	
トランプ	1	
ルーレット・ゲーム	1	
計16種類	71	1隻平均7.1種

表11. 船内備え付文化・趣味用具の利用度

某社31隻 1977調査

利用度	よく使う		時々使う		使わない		計(所有隻数)	
テレビ	26	86.7	4		0		30	96.8%
ステレオ	25	80.6	6		0		31	100.0
ビデオ	29	96.7	1		0		30	96.8
麻雀	31	100.0	0		0		31	100.0
囲碁	9	30.0	12	40.0	9	30.0	30	96.8
将棋	6	20.0	14	46.7	10	33.3	30	96.8
図書(平均冊数)							31(平均387冊)	
8mm	0		1		5		6	19.4
オセロ	2	50.0	1		1		4	
花札	0		1		1		2	
引伸し用具	0		0		1		1	
カセットデッキ	1		0		0		1	
その他	0		0		1		1	

表1.2. 備え付運動用具とその利用度

某社31隻 1977調べ(単位:隻、%)

	利 用 度						所有隻数 (全31隻中)	全31隻中の 所有比率
	よく使う		時々使う		使わない			
デ ッ キ ゴ ル フ	3	11.1	9	33.3	15	55.6	27	87.0
野 球	2		8	32.0	15	60.0	25	80.6
バ ド ミ ン ト ン	0		0		12	100.0	12	38.7
卓 球	7	36.8	5	26.3	7	36.8	19	61.2
エ キ ス パ ン ダ ー	3	16.7	7	38.8	8	44.4	18	58.0
な わ と び	5	18.5	16	59.3	6	22.2	27	87.0
バ レ ー ボ ー ル	0		2	18.2	9	81.8	11	35.4
ド ッ チ ボ ー ル	0		0		8	100.0	8	25.4
ソ フ ト ボ ー ル	1		9	37.5	14	58.3	24	77.4
ボ ク シ ン グ パ ン チ	0		1		1		2	6.4
自 転 車	3	16.7	8	44.4	7	38.9	18	58.0
輪 な げ	2		10	38.5	14	53.8	26	83.8
ゴ ル フ	4	33.3	5	41.7	3	0	12	38.7
バ ー ベ ル	1		2	33.3	3	50.0	6	19.3
魚	0		1		0		1	3.2
バ ッ ク 台	1	100.0	0		0		1	3.2
チェストウエイト ブルワーカー	0		2		0		2	6.4
ダンベル・鉄アレイ	0		1		1		2	6.4
ス タ イ リ ー	0		0		1		1	3.2
計	32	13.2	86	35.5	124	51.2	242 100.0	1隻平均7.8コ

表1.3. 船種別備えつけ運動具と体育室の有無

某社31隻 1977調べ

	貨物	鉦石	鉦油	油・LPG	コンテナ	他	計
調 査 隻 数	11隻	5	5	2	6	2	31
備えつけ運動具数	63種	49	46	17	56	11	242
平均所有種類	5.7種	9.8	9.2	8.5	9.3	5.5	7.8
体育室設備船	0	5	2	2	4	0	13

## B. 若干のまとめ

1. 船の文化・スポーツ・娯楽等の設備については、会社により呼び名と機能が必ずしも一定していないが、文化・娯楽設備では、スモークルーム又は娯楽室、図書室を設備している船が多く、スポーツ設備に比して古くから備えつけられている。これらはよく使われているが、その規模や内装に関しては今後の改善の余地があろう。スポーツ設備の設置は1970年代以後に増えはじめ、特に体育室の設置が著しく増えている。しかしゴルフ、デッキゴルフ、プール等の設置は会社のこれらに対する基本的な考え方に差があるとみられ、会社による差が著しい。また船の文化・スポーツ・娯楽等の設備は就航日数の長短よりは船種によって差があるとみられ、建造年も比較的新しいものほどよくなっているといえる。船種、就航期間、建造年等種々の要因にわけてこれらを考察したところ、鉱石船、鉱油船、油LPG船、コンテナ船等の設備状況がよく、貨物船があまり設備をもっていないことがわかった。今後の問題点としては、これら船内の文化・スポーツ・娯楽施設を具備した船を建造していくと共に、その内容についても大きな注意をはらわねばならない。たとえば、体育室といえ、海上労働調査報告第20集で報告したごとく、少くとも床が木張り、天井が3階ふきぬけ(7m以上)で、床面積が18m×12m以上であるようなものを考える必要があろう。また、娯楽室、タタミルームにおいても、読書をする人と音楽をきく人と麻雀をする人とはおのずから隔離されていなければならぬであろう。また、デッキの使い方も、船種や航路を考慮に入れたより積極的な

使い方があてである。

2. 船内備え付け文化・趣味用具については、備えつけが多いのはステレオ、テレビ、ビデオ、麻雀、囲碁、将棋等であり、図書は平均400冊弱の備えつけがある。そのうち、よく使われているのは、テレビ、ステレオ、ビデオ、麻雀等であり、囲碁、将棋は船によってよく使う船と使っていない船とに差がある。

船内備え付け運動具についてみると、全船の平均備えつけ種類は約8種であるが、やはり体育室を設備している船は運動具の種類を多くもっており、体育室のない船は平均を下まわっている。デッキゴルフ、野球、輪投げ等は約7割前後の船に備えつけられている。しかし使用度でみると、卓球、ゴルフ等はよく利用されている。逆にほとんど使用されていないものはバドミントン、バレーボール、ドッチボール等である。

3. 船内での催しものをみると、麻雀大会がもつともよく行われており、ついで運動会・ソフトボール、デッキゴルフ、卓球等のスポーツやトカルチョ・ロッセリア等のかけ事がなされている。これら催しものは就航期間の長い長期航路が平均2.8回(前航海と今航海)で他の約1.5回前後に比して多い。又船種別にみると、鉱油船、油・LPG船、貨物船等が多い。これらの催しものは復航が最も多く、次いで往航、停泊中に行われている。特に麻雀、ロッセリアは復航に行われることが多い。

4. 船内で何か催しもののために、任意で船内レクリエーション委員等を設けるシステムは1社をのぞいてみられなかった。この1社についてみると、船内レクリエーション委員を任意に設けている船は約22.6%である。またその

なり手も、前大会で優勝したものやブービー者であったり、船の職名できまっていたりするが、職種、パート等種々である。

5. 船内での文化・スポーツ等で趣味のグループ活動についてみると、某社31隻の例ではグループのある船は平均2グループ位あるが、ない船では全くなく、その差がはげしい。またグループの平均参加人数をみると、麻雀とゴルフは多く、10人前後又は乗組員全員に至る程であるが、その他の種目はそれぞれの種目に固有な最小単位の人数又はその2～3倍の人が参加人数である。船内のグループは運動のグループが比較的多い。

以上、外航労務協会所属の6社10隻と某社31隻について、船の文化・スポーツ・娯楽的設備、実態とその利用度についての調査の結果を述べた。

調査対象船を選ぶにあたり、6社10隻の場合あらかじめ、題意に関して代表的に考えられる船を選んだこともあって、種々の設備の船での利用実態が明らかになった。しかし、全体的にいえることは、いかに船の文化やスポーツや娯楽等の設備がよくなったといえども、1船にそのすべてを具備することはできないし、たとえできたとしても、それは1隻ずつであり、現在運航している数多くの船からみれば全船員がその恩恵に属するのはとうてい無理である。

これらのことを考慮すれば、船の文化・スポーツ・娯楽等の船員の私生活に関する設備の向上と共に、大切なことは、船と陸との間、または船と船との間（日本船と外国船間も含む）の、船員の私生活、特に文化・スポーツ・娯楽面でのサービスシステムをつくることが不可欠であろう。もし、このサービスシステムが確立すれば航海中の船員といえども仲間（仲間意識）をもち、個人が望めば陸の（会社、地域、外国の土地）諸施設の恩恵を受けることができる。このサービスシステムは当初とり扱い内容は少くとも、その規模は大きければ大きいほど、すなわち、日本全国はもとより、外国の主要港でも利用できるほどがよく、また現在の船会社の本店支店の存在と、電話・テレックス・郵便等の通信網の発達からみると、不可能ではあるまい。

船員が乗船中も、会社の一員としてはもちろん、地域の一員としても、このようなサービスシステムを通じて自覚できるということは、船員の離家庭性、離地域性の一部をうちやぶることにもなるであろう。そしてそれはまた退職した後の船員の生活にも好影響を与えるに違いない。（昭和51年度「船員福祉の理念とその具体策の調査研究第Ⅱ編、担当者篠原陽一、服部昭、広田彌生のうち、執筆者広田彌生の要約である）。